

兄弟の数が少なくなり、物が豊かになった現代は、家庭でも玩具の取り合いをすることがほとんどなくなり、同じ物を一人1つずつ持っているという話をよく耳にします。子ども達は長時間に及ぶ園生活の中で、子ども同士の関わり、特に物を取り合ったり、口喧嘩をしたりして子どもは子どもなりの社会の中で育ち合っています。そこで今月の保育の広場では子ども同士の関わりについて新聞の紙面からご紹介します。

けんかのきもち

子供同士の取っ組み合いのけんかは、幼児期や学童期でも最近ではめっきり少なくなったと言われる。そうした背景には、現代の大人の側の都合があるように思われる。公園や子育て支援センターなどで1~2歳の子どもとその親の姿をみても、物の取り合いが起ころうとすると、親が未然に防いでしまうことが多い。子どもが他の子どもの物を手に取ろうとすると、親が「ダメでしょう」とストップをかけてしまうのだ。もちろん親の側の気持ちもわからないではない。子ども同士のトラブルが起こると、相手の親との関係が悪くなってしまいかねない。今ときは、子供同士のトラブルは親同士の関係に大きく影響する可能性があるからだ。幼稚園や保育園も、親からの苦情を懸念し、子ども同士のトラブルがなるべく起こらないようにと気持ちが働きがちだ。だから子どものけんかはあまり奨励されなくなる。ここにも大人の側の都合が存在する。

『けんかのきもち』（ポプラ社）という実話にもとづいた絵本がある。そこでは、男の子2人の激しいけんかが描かれている。蹴り、パンチ、取っ組み合いが起こる。やられた側の子どもは悔しくて泣きながら家に帰ってしまう。家に帰って、母親の胸で泣くが、気持ちは収まらない。けんかをした相手が家に「ごめんな」と謝りにくるが、納得いかない。

しばらくたって、園の友達がみんなで作った餃子を家にもってきてくれる。それをたくさん食べると、元気になってその男の子はまたみんなのもとに戻っていくというお話だ。子どもが自分の思いを發揮している園では、この絵本のような激しいけんかになることがある。

こうしたけんかを見ていると、上のしかかっている子どもが辛そうな表情をして、下の子どもをたたいている姿を見ることも多い。しかも、たいていグーで顔にパンチすることはない。最初は相手への憎しみからはじまったけんかでも、相手の痛みを心で痛めているのだ。まさに、けんかは自分の痛みだけでなく、相手の痛みを感じる経験の場でもある。また、さっき大げんかした子ども同士が、けろっと仲直りしてその後一緒に何もなかったように遊んでいることも良くある。

お互い晴々しい顔で、前よりも親しくなっていることも多い。

昔「子ども」だった方はよく理解できるだろう。こうやって他者との折り合い方、感情の表現の仕方を学んでいたのだ。今の子どもたち（大学生も）は、自分の本意や感情をぶつけることが少ない。

いつも、自分が傷つかないために、相手を傷つけないように気遣いをしている。だから、本当の友情も生まれにくく、どこかで孤独を感じている。本当にこうした人間関係でよいのかと考えさせられてしまう。

けんかを手放して奨励するつもりはない。ただ、子どもの時代のけんかと和解を通して、自分とは違う他者との折り合い方を学び、平和な社会を作るための大事な経験をしているように思えてならない。

お子さんから友達とけんかした話などを聞くと心配されることも多いかと思います。しかし、その経験こそが現代社会において備えておきたい力になっていくのです。この時期の子どもの姿を寛容に見守り、子どもが自分の欲求を十分に満たせるように接していきたいものですね。

